



佐々木敬介は 1993 年静岡生まれ、2017 年東京芸術大学絵画科修士課程修了、2013 年から各コンペティションに入選、2016 年の on the steps を筆頭に様々なグループ展に参加、今回が初個展となる。佐々木は今回、様々なタイプの作品を発表した。若さの冒険ということも出来るし、自らの方針が整っていない、様々なシーンや顧客に対して媚びているという悪口も聴こえてしまう。

「観る者の精神性に訴えてくるような緊張感と神聖感、限定された要素で構成されているとは思えないほどの雄弁な表情、描き方を分からせない巧みな技術と創意工夫された独自の表現方法、画面のハリ、、、どこをとっても見事と言う他なく、観る者をあっという間に魅了してしまう作品力を誇る」(web タグポート)。既に高い評価がなされると、やっかみも多くなることであろう。

各作品は、確かに日本画の最小限の技法により、独特の展開を遂げている。創意工夫を凝らし、生まれてくる自らのイメージに対して忠実に向き合って制作している姿を私も確認した。しかし問題なのが、過去の他のアーティスト達の作品の動向を全く知らないことである。それは本人が知らないと言ったからではなく、各作品が単独で、連続性を帯びないことから私が読み取ったことである。

私は決して過去の系譜に属し、自らの作品をミュージアムピースにすることを目的とすべきだと言う訳ではない。寧ろ、過去の作品にはない新しさを求めて欲しいのだ。

そのために、人類が誕生してから創造した何百億を降らない作品に挑戦し、これまでにない創造力を駆使して欲しいと、誰に対しても私は感じる。WEB が出来た、今年の商品の流行はこれだ、世界の動向がこうなっているから対抗する為にこういった作品を制作しなければならないという方向性では小さいであろう。もっと巨大な目的意識を持って欲しい。

ところが現状はそうはいかないことも、私は前提としている。機動的な資本主義が蔓延する中、誰もみたことのない世界を芸術が形成しなければならないのに、今日の経済の動向に合わせなければならないアーティストの苦悩もあるだろう。求められているのだから、応えなければならぬ傾向もあろう。近代に生まれた現代美術は、資本主義経済から逃れることはできないのだ。

「月曜日からスタートします。すでに、遠方の方から展示は見に行けないけど、作品の写真と値段を教えてください」というメールがギャラリーに届いてびっくり。ステップスオーナー、吉岡まさみのブログからの引用である。NYC の老舗画廊群ですら、続々と店を畳み、アートフェアどころか web 販売に勝つことが出来ないことを嘆いている。それを時代が変わったと片付けていいのだろうか。

異なる話が長くなった。私は佐々木の仕事に対しては、その丁寧さに対して高く感動し、これからも応援したいと考えている。アーティストよ、闘おう。

